





閑雜記卷之十二



焦氏類林曰養筆以硫黃酒舒其毫養紙以芙蓉粉借其色養研以文綾蓋貴乎隔塵養墨以豹皮囊貴乎遠濕
又曰端谿硯水中者石色青山半者石色紫山頂者石尤潤如猪肝色者佳若匠者識山之脉理鑿一窟自然有圓石青紫色者琢而為硯其直千金謂之子石硯
端谿硯有三種曰巖山曰西坑曰浚磨石々色

昭和三十一年
一月十八日
購本

深紫襯手而潤叩之清遠有青絲曰小鷓鴣眼
乃巖石其次色赤叩之乃潤鷓鴣眼色紫紋漫
而大乃西坑石其下青紫色向明側視有碎星
光點如沙中雲母乳而少潤謂之沒磨石西坑
硯三當巖石之一沒磨石三當西坑之一
又曰端石出端谿色理潔潤本以子石為上子
石者在大石中生蓋精石也而流俗傳俗傳訛
遂以紫石為上又以貯水耗為隼有鷓鴣眼
者為貴

又曰溫公獨樂園之讀書堂文史萬餘卷公晨

夕所閱虽累數十年皆新若手未觸者嘗謂其
子公休曰賈豎藏貨具儒家惟此耳然當知室
惜吾每歲以上伏及重陽間視天氣晴明日即
設几案於當日所側羣書其上以暴其腦所以
年月雖深終不損動至啓卷必先視几案淨潔
藉以首禱然後端坐看之或欲行看即承以方
版未嘗敢空手捧之非惟手汗漬及之恐觸動
其腦每至看竟一版即側右手大指面襯其沿
而覆以次指面撫而挾過故得不至揉熟其紙
每見汝輩多以指爪撮起甚非吾意今浮圖老

氏猶知尊敬其書豈以吾儒反不如乎汝當志之

難産少い雲母散と母内雲母消石等分細末を
葵子榆白皮れ煎けり一錢目と下り

産後古血下りるる少い四物湯小延胡索沈香牡
母を加へる紙下りるる少く良姜と大少加母は

古血くちたれて下る又法其化の粉と子米の
ふくも湯少く送下其化の粉と子米の

ふりともく空中小水少く一升ゆえ以上
茶誤
これ茶漬つるるなりといふこれ水の津田云



仙と云ふ医師ありこれ又予の故地ふすこ
りり玄仙といふ人こころて医を業とす
其よりより傳りれる方口訣と云ふなり
ほきの後とて難産目的とるる方二る方小
ちりしと云ふり一家の医師り予丙辰の夏往
來此やまひありるなりつるるなりとて論京
中ありりこれ虚脱ありり還補薬を血
湯の両面の病ありといひるるなりと論京
けり茶漬のつるるなりと云ふなりと云ふなり
阿部

昔より一鳴り響く藤井一守の市中の医のくも
小坂田揚庵 高田長庵 長庵は揚庵の弟 此れは
ひかり長庵を同藤井此は升俊庵の醫學
一と經體のりふふり 傷寒論傳經に
説くと經體ふ川合を考つけりふなる事し神
彙れるるるとも説り揚庵のくもはつふ
里は是しとけりこれに子仙仲の著るる一
にそふれり一とふ短あり尤吉益流のむ
よのきこれられ治症をいふ視をれは又誤
治も少くはるる考一にそふりて

多岐のくもと藤井論をれはつれりて
けりてはけりあり 右藤井安とて眼科
ふりては眼科をうけ眼科をこれり
しそふりも 曹君夫とて一やうに解くは
へりてこれりも 藤井とて一とてははる
るにふりて人といふるも此はあつたき
物故田沼氏の藤井少老職つとて人のいふ
つれりては治眼の術ふりてはあつたき
れりては人あひりては益多を得るふの
一 酒刺せりては 一とては安とては 醫師

國聽言虽廣而實無以盡天下之美ふ年子の
忠詔封事の中感は一人の上のまゝの
これも後も知るへし大臣のまゝの
さうも知るへし感は一人の
さうも知るへし感は一人の
蟬丸と盲人といふはいひしるもたらずに
清らうの盲人といふはいひしるもたらずに
これも盲人といふはいひしるもたらずに
集録の一といふはいひしるもたらずに
ていふはいひしるもたらずに

あまと盲人といふはいひしるもたらずに
これも盲人といふはいひしるもたらずに
家治公天年丙午のうられにていふはいひしるもたらずに

あまと盲人といふはいひしるもたらずに
これも盲人といふはいひしるもたらずに
あまと盲人といふはいひしるもたらずに
これも盲人といふはいひしるもたらずに
あまと盲人といふはいひしるもたらずに
これも盲人といふはいひしるもたらずに
あまと盲人といふはいひしるもたらずに
これも盲人といふはいひしるもたらずに
あまと盲人といふはいひしるもたらずに
これも盲人といふはいひしるもたらずに

たをやいふ所をくくし取りお動ふ秋の月
年のや賢あつたをりひい

年とをれまもやいはけふ千七千たふた

九月九日松平伊豆守は明経臣れりて各れ

くくく

歳ふもゆりーまもはるくく涙くくまふまれ益

といひやりりれいえー

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

いこのあけのくくく後まも歳りあひをれこれ
能臣能先もおくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

靜寄餘筆

二洲先生

海南無狐或曰舟載而至

必死豈南方陽明之氣不容陰邪者耶

地一書曰

千里不生狐然山陽一道相配延以至豐凌東西

將長不下千里則此說為妄

又曰又州西鄙土中往往出枯根朽株其質甚

堅鉅斷之如黑漆髹之西條匠人嘗作墨架贈

余甚為奇物相傳上古有一神樹曰扶桑其大

無量日上輒其蔭延及三韓中古之時僵埋土

中此其破折之餘也果尔所謂東海有扶桑國

者豈謂伊豫二名之州耶然此說亦甚奇

又曰嘗聞松山城外數十里間往往有木皮繞

田畝圍皆數百武其堅凝如石傳以皆為上古

伐去大木處亦是扶桑之類歟

又曰伊豫山中有一老杉其大蓋百圍云云世

所未聞旁有小聚落曰呼曰杉村云

又曰陳眉公曰香令人幽酒令人高琴令人癖

茶令人爽竹令人月令人孤碁令人閑杖令人輕

水令人空雲令人曠劍令人悲蒲團令人括美

人令人憐僧令人淡花令人韻金石彝鼎令人

古余曰廣數條曰山令人靜禽令人暢松令人

莊嚴も六いさふ見訓めたる北史に於ても
いさふ類のみは音をうてはさしつめれ
晴ぬ清嚴寺にありて不鉄碑ありと夏後
中世にありて後といふにありてつし
夏後の新少をわしとせしむるなり
よのふらうとてわぬ志しとて之をわ碑言
とて天守幅一尺六分厚さす移す南雲漢と
て隣しとてありてふと都の字に河守公綱の
正和元年に建しとてふの説に北西正平年
よもふらうとて移すは字に時とてありて

とて河とて寺僧もとてとていふ
よや戯場とて名をるし字にうたてて
とて河とてとてありて多くとて費わし
かたはるに利ありてよやとて利あり
則ち農民に秋に樂しとていふとて
とてこれありてはとて村とてあり
よとてとてとてとてとてとてとて米
浅草集ありとてありとてとて

十四日

露のふらう白沢氏家とてとて所とて

山に冥相彼にやまふ奇にわたり
くふ太田
原水跡に宿をとりて

十五日

定まらぬにわたりぬ市に村越城を越ゆ
併し婦をくわ川に流し越城のやまのあ
れに後田のりこれ庭ふ山あり眺望と
ふまらぬにわたりて寺あり村ふ庭をむこれあり
と無き係りありと代りて入るをわたり
えりあり庭ふ山ありこのまふわたり
あり甲乙女呼集りて麓の山田ふくへ入る

とを解と没りしとふれし山亭人
とわたりてまわぬありと馬を下流名わたり
とわたりてつりてをりてわたりてわたり
とわたりてまわぬあり辰の刻に於此芦花れ
やまをまわると宮の村ふあり併し城の
明神ふ宿と名坂の跡ふ庭ふ白川より
とわたりてと家跡もありしとわたりてこの跡
とわたりてつりしとわたりての住ふありと有
目つりてつりてつりてつりてつりてつりて
この跡ありしとわたりてつりてつりてつりて

一人のそとわりのふりあつた「思」しぬまのくくさる
もう、付金わすれ、あつた月々の贅を、
必川の城小恙し、う、民を、
つらそ、な、
けり、

予此に肩背疼痛し、
あつた、
あつた、
あつた、

丙辰の紀行

八月九日

卯耕とて比叢途辰のくちあつた、
の火うけ、
あり、
も、
あ、
あ、
あ、

りふに氏家ふまゝくつゝと

十一日

ふらぬありつゝをこたりまゝ、志り一りハ定志
く之幅やしく四方ハ山まゝさやうた見つて其
それわらぬ長ねしゝるらひぬ午の別時より
ゆふをきこゝるぬまゝまよにありゝゝゝゝ山
のまゝまゝたこれ近き川まゝくゝをゝゝゝ
れうをねとゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ふはゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ぬり先の川まゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

一
一
一

ゆふまゝ、後考れくゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
岩白の流りゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
是れつゆありゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
こゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

山川の段のひきまも移りもあしゝゝゝゝゝゝ
まゝゝゝゝゝ 太田原もゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
やゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

